優秀賞

── 中学生以下の部 ──

「歌うように音楽を」

髙畠菜央さん

推　し　本:『のだめカンタービレ』

著　　:二ノ宮知子

推したい相手:普段クラシック音楽を聴かない人

「歌うように音楽を」　髙畠菜央

その漫画は何故か一巻と十一巻だけが家の本棚にずっとあった。それは「のだめカンタービレ」という漫画で、主人公のだめこと野田恵はピアノの才能に溢れているものの、プロになる気などさらさらなく幼稚園の先生を目指していた。しかし、先輩の千秋によりその才能を開花させピアニストになるという話だ。私はピアノを習っていたため表紙に惹かれ、何度かその漫画を読もうと思ったが、途中が抜けていたためなかなか読む気になれなかった。しかし、当時アメリカに住んでいた私は母との約束で、毎日、日本語の本を読むことになっていた。パラパラとページをめくるとセリフが少なさそうで簡単に読めるのではないかと思い、ある日手に取った。読み始めると面白くて止まらず、あっという間に一巻を読み終えてしまった。漫画なので音楽が聴こえてくるはずがないのに、音楽が押し寄せてきた。読み終わった後も汚い部屋で奏でられたのだめ演奏のベートーヴェンが耳から離れなかった。続きが読みたくてしょうがない私は仕方なく十一巻を手に取った。どうして二人がヨーロッパにいるのか？何故千秋が指揮者コンクールに出ているのかわからなかったが、あっという間に読んでしまった。知らない曲はYouTubeで探し、聴き、のだめの世界に浸っていた。音楽は素晴らしい。クラシック音楽を普段あまり聴かない人にこそ、この漫画をきっかけに色々な曲を聴き、作曲家に触れてほしいと思った。十一巻が最終話なのかと思いきやそうではなかった。どうしても途中と続きが読みたい私は母に他の巻はどこにあるのか尋ねた。しかし、度重なる引越しで行方不明になってしまったとのことだった。私は諦めきれずに、日系の書店で探したが価格が日本の倍以上するし、無い巻は日本に注文せねばならず、全巻揃えるのは不可能に思えた。そうこうしているうちに日本に帰ることとなり、受験や新しい環境に馴染むことに必死で漫画の存在を忘れていた。日本に帰国し、しばらく経った頃、学校から帰ると母が見たことのない分厚い「のだめカンタービレ」を私の前に差し出した。新装版という物が発売されたため、本当は母が読みたかったのかもしれないが、ずっと読みたがっていた私のために買ってくれたのだ。やっと何

故のだめ達がヨーロッパにいるのか、千秋が指揮者コンクールに出ているのかがわかった。そしてやはり漫画は音楽で溢れていた。ページをめくるたび、音楽が押し寄せてくる。その合間合間にのだめの日常生活の駄目さかげんやオタクな所、千秋先輩の俺様振りなど面白い話しが挟まれている。もちろん二人の恋愛要素も重要だ。そして二人を取り巻く魅力的なキャラクター達。時には笑い、時には感動しながら夢中で読み進めた。最後にはオペラ編でモーツァルトの魔笛が描かれていた。私が最初に観たオペラも魔笛だった。オペラを初めて観た時の感動と興奮が蘇ってきた。アメリカのメトロポリタンオペラにはキッズフレンドリーデイという日があり、私が住んでいた頃は毎年魔笛がその演目だった。開演前に出演者と一緒に写真が撮れたり、オーケストラの楽器に触れたり、演出の真似事ができたり、オペラの衣裳を着たりすることができ、親子でオペラを楽しめる日だった。このようにアメリカには子供でも日常的にクラシック音楽やオペラに触れる機会があった。日本ではクラシック音楽やオペラは敷居が高く、一部のフアンのためという傾向がある気がする。「のだめカンタービレ」の中でもオペラを知らない人でも楽しめるようなオペラをつくりたいというセリフがあった。クラシックのコンサートやオペラに子供や初心者でも気軽に行かれるような機会が増えれば、日本でももっとクラシック音楽が聴かれるようになるのではないだろうか？そして、聴きに行く人も構えず、もっと気軽に音楽を楽しむべきなのではないだろうか？クラシックのコンサートに一度も行ったことがない、そしてオペラを一度も観たことがない人にこそ、この漫画「のだめカンタービレ」をお勧めする。きっと漫画で描かれている曲が聴きたくなり、オペラが観てみたくなるはずだ。そしてきっとそれが音楽の世界を広げてくれるはずだから。